カンボジア（プノンペン）旅行雑感　２０１５．７．２７～２８

プノンペンは昨年９月以来２度目の訪問である。前回と今回も業務出張であったが、２日間の滞在から最近のプノンペン事情を以下の通りまとめた。なお以下のドルは米ドルを指す。カンボジア通貨はリエルだが、1 ドル未満の決済に一部使用されるが９９％はドルで決済されている。

1、　27 日

クアラルンプール発６：４５エアアジアで７：３０にプノンペンに着く（時差１時間)。エアアジアはＬＣＣであるが、日本の航空会社と同じぐらい時間に正確である。プノンペン空港も昨年に比べ整備された。写真を持参すればプノンペン空港内でビザが取れる。昨年ビザ申請費用は２５ドルであったが、今年３０ドルに上がっていた。タクシーの初乗り料金も 10 ドルから 12 ドルに上がっていた。最低賃金も今年は１２８ドルだが、来年は１５０ドルになると現地では予想されている。物価上昇が凄まじいのが気がかりだ。

空港から日系企業と現地資本の合弁で建設された経済特区に向かう。早朝だったので３０分で到着した。現在この経済特区は１００％カンボジア資本に変わっていた。最大の日本企業はミネベアで、近々デンソーが進出する。大きな看板が目立つ。日本企業が３０社程度入っているそうだ。特区にはレストラン東京（日本料理屋）が繁盛していた。８～９ドルと値段も味も日本と同じような昼食が食べられる。中国料理屋もあるそうだが、中国人と韓国人も見かけた。

夕方、宿泊ホテルに移動した。昨年はラッフルズ・ホテルであったが、今回は 5 月開業の東横インにした。３９ドルから５９ドルまで３種類あるが、５９ドルの部屋は３２平米、２ベッドで４人掛けのテーブルとキッチンがあった。快適なホテルである。

さて、その夜は現地社員との懇親会があった。市内の巨大中華料理屋で開催された。カンボジアは極めて特異な現代史を歩んでおり、人口の半数以上が３０歳未満である。現地幹部は日本語か英語を話す。過去の歴史についての会話は限定的だったがＩＴの発達で急速に情報が増加している。また教育水準も上がっているように思えた。

若者は夢と志に燃えているようだ。宴会での会話を聞いていると会社や仕事の話は殆どなく、家族や彼氏彼女の恋愛談であり、およそ日本企業ではありえない内容だった。日本の遠い昔の風景を見るようだった。若者の特性は天真爛漫であるが、まさにカンボジア社員は正にそのようだった。

市街を眺めるとバイクと自動車は１０：１の比率で、バイクが圧倒的である。自転車の姿はほぼ消えた。そのバイクには３人から４人が乗っている。規制され

ているとのことだが、4人乗りも頻繁に見かけた。朝と夕方のラッシュアワーでは大変な混雑である。信号機も警察の交差点案内もないので、無秩序である。開発途上国の典型的な風景がそこには見られた。しかし中国や台湾も30年前はそうだった。きっと改善されると想像する。

経済特区から市内中心までには約２０ｋｍだが、1時間15分かかった。道路を行きかう人々は誰でもスマホを携帯している。この文明の利器はこれから大きな影響を及ぼすことは間違いない。

プノンペンは１５０万人の都である。街には公園が多く、仏国植民地の面影が残っている。大きな独立記念モニュメントはそこかしこにある。シアヌーク殿下（死去済み）の夫人である女王の大きな写真が掲げられていた。

ホテル事情として、ラッフルズのような欧米系高級ホテルが沢山整備されている。日本企業の進出拡大を見越して、東横インがこの夏開業した。また昨年6月にはイオンが巨大モールを開業している。衣食住で日本人駐在員の生活は随分改善されたといえよう。

しかし物価が高騰しており、アセアン諸国内での産業競争力の未来は不明瞭だ。ガソリン価格はリッター1.1ドル（140円）と割高である。マレーシアは70円である。またカンボジアのプノンペンには鉄道施設はあったが、列車が殆ど走っていない。北部のアンコールワット向け列車は１日１本だそうである。

道路事情として市街は舗装されセメント道路（熱帯によりアスファルトだと隆起するとのこと）だが、ほとんどまだ未舗装である。インフラ整備は進んでいるが、他のアセアン諸国に比べ大幅に遅れている。

2、　28日

友人とラッフルズ・ホテルで朝食をとった。昨年ここに2泊したのでその豪華さとロケーションは感動する。１泊２００ドル超なので相当高いが、それなりのサービスであり納得できるものだ。今回の朝食でも政府高官、軍人、ビジネスマンに遭遇した。プノンペンに更に高価なホテルが２軒あるそうだが、格式とサービスではここが最高と思う。

友人はここに既に１８か月長期滞在（レジダンシャルスイーツ）している。ラッフルズ・ホテルはシンガポールが有名だが、ペナンとプノンペンも同じ経営者がホテルを運営している。そのサービスは大変優れており世界的に評価されている。

3、　その他　気づきの点

海外投資での経済発展を目指しているのは他のアセアン諸国と同じであるが、安い賃金の他に注目すべき点は、日本語を話す国民が多いことである。そして親日であることだ。その理由には国際連合の元明石事務次長が復興に重要な役割を果たしたことや、ＯＤＡと難民救済などが正しく国民に知らされていることである。

走っている自動車で人気の高いのはホンダが一番のようだ。タクシー運転手によればホンダ車の燃費が一番よいとのことだった。

フランス植民地時代、ベトナム人が下級官吏としてカンボジアに10万人単位で派遣された。現在国民の５％はベトナム人とのことだが、カンボジア人のベトナム人への思いは尊敬と妬みが入り混じった感情のようだ。

首相官邸の隣に北朝鮮大使館がある。カンボジアと北朝鮮の関係は深く親しい。市内には北朝鮮料理専門店がある。カンボジアの現代史が関係しているのであろうか。

昨今ミャンマーとカンボジアの西側諸国への門戸開放が進んでいる。これはベトナムが

西側との関係強化で急速に経済発展している事情が国民に知れ渡り、外交政策を変更したと思料する。

（2015.8．1 記す）